慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハワイ大学福澤講座と野村兼太郎講演
Sub Title	
Author	小室, 正紀(Komuro, Masamichi)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1995
Jtitle	近代日本研究 Vol.12, (1995.) ,p.161- 210
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	付録 : 野村兼太郎「福澤諭吉と日本の近代化」(小室正紀訳)
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19950000-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第十二巻（一九九五年）

ハワイ大学福澤講座と野村兼太郎講演

小室正紀

はじめに

一年程前に、福澤研究センターの西川俊作所長より、「こういうものが見つかったので、もう少し事実関係を調べた上で、紹介をしてほしい」と、一冊のファイルをお送りいただいた。ファイルの中味は、「ハワイ大学福澤講座」関係の書類四点（以下、それぞれの書類を注（1）に示すように「F1」から「F4」の略号で呼ぶ）と、故野村兼太郎教授が昭和三十二年にハワイ大学で行った英文講演原稿（以下、「F5」の略号で呼ぶ）であった。(1)

『慶應義塾百年史』によれば、ハワイ大学「福澤講座」は、昭和十二年ごろからハワイ大学と慶應義塾大学との間で話が進んだもので、慶應から講師を派遣し、東洋研究の講義をハワイ大学で行う計画であった。(2) この計画

は、戦争により実現を見ないまま戦後になり、昭和三十一年に、ようやく派遣されたのが野村教授であったのである。この間の簡単な事情は、『百年史』に書かれている。しかし、それ以上の事実関係の調査は、私のものぐさで、なかなか手が付かないままになっていた。ここに来て、多少なりとも、周辺の状況を調べることが出来たので、紹介する次第である。

この小論には、二つの課題がある。第一の課題は、どのような状況の下で、なぜハワイ大学と慶應の間に、「福澤講座」の話が進んだのかを、紹介することである。計画が話し合われていた当時は、日中戦争の開始から日米通商条約の廃棄に至る時期であり、日米関係が次第に緊張を孕み始めていた。このような時に、政府間の関係とは別に、日米の大学と大学の間で、国際的な文化協力への努力が払われていたということは、やはり思い起こすべき歴史の一コマであるだろう。

一方、慶應義塾の歴史にとっては、この計画はある意味では、一時代を画するものであった。慶應義塾は、蘭学塾、英学塾からはじまり、欧米の学問知識の摂取に力を注いで来た。またそのために多くの外国人教師も雇用した。「福澤講座」は、このような、学問輸入機関としての歴史を持っていた慶應義塾が、いわば初めて、組織として、欧米の大学に教師を派遣する計画であった。文化の輸入者であった塾が、輸出者としての能力を発揮する転機であったことになる。この点でも検討に値する計画であったと考えられる。

第二の課題は、野村教授がハワイ大学で行った講演「福澤諭吉と日本の近代化」を翻訳し、蛇足になることを恐れずに、若干の位置づけを行うことである。野村教授が、膨大な業績を残され、日本の社会経済史および日本経済思想史の基礎を築いたことは周知のことである。しかし教授の業績は、実証的であり、教授は、極力臆断を表面に出さないように禁欲を守られた。そのために、教授には確固とした、歴史観、歴史学観があったにも拘わ

らず、こうしたものは文面の背後に隠れており、概して把握しにくい。しかし、今回翻訳の上紹介する、講演「福澤諭吉と日本の近代化」では、聴衆は、日本史についての予備知識があまりない外国の人々だったと思われる。そのせいか、この講演では日本近世近代史を見る教授の目がストレートに出ている。その意味で、この講演を当時の日本の関連学会の研究動向の中に置いてみると、改めて教授の研究の意図が確認できると考えられるのである。

福澤講座計画の概要

「ハワイ大学日本文化特別講座（福澤講座）」（以後、「福澤講座」とのみ表記する）[3]とは、いつ考えられた、どのような計画なのか。まず、この点を残されている資料から確認しておこう。管見のかぎりでは、この計画を具体的に説明している最も早い資料は慶應義塾側のもので、『百年史』に引用されている昭和十二（一九三七）年十二月二十一日の第十五期第二回評議員会議事録である。[4] また、これに次ぐ資料は、昭和十三（一九三八）年六月にホノルルで、ハワイ在留日系人・日本人向けに出された、福澤講座への募金呼び掛けの趣意書（F1）である。この趣意書は今回発見されたファイルにあったもので、評議員会議事録より半歳後の日付だが、ハワイ側では、最も早いものとなる。この二つの資料を見て、福澤講座計画の出発状況と当初の計画概要を整理してみよう。

〔昭和十二年十二月二十一日　第十五期第二回評議員会議事録〕

小泉塾長より、布哇（ハワイ）大学に於ては予てより其の位置の関係上、熱帯農学、東洋研究、人種社会学等に重きを置き特色を出さんことに努めつつあるが、東洋研究所長シンクレーア博士は又福澤先生に私淑し、今夏来朝の際福澤講座の名に於て東洋研究の講義を設け度き希望あり、右に要する費用年額五千弗の内二千五百弗は米国側に於て調達するに依り、他の半額を日本側に於て配慮せられ度旨の交渉あり。右は国際文化振興の上より見て最も有意義の計画に付先般理事会に於て協議の結果、塾員有志諸君の援助を求むるに決し大体初年度の経費に充当すべき寄附の申込を得たる次第を報告し、今後の援助を希望するところありたり。

〔昭和十三年六月　ハワイ側の福澤講座への募金呼び掛けの趣意書〕（F1）

日本文化特別講座設立に就て

ハワイ大学東洋科長グレッグ・エム・シンクレーア教授昨夏渡日の際、慶應義塾大学総長小泉信三氏と協議の結果、ハワイ大学に日本文化の特別講座（福澤講座）を一ヶ年間設置し、日本よりの権威者を招聘する計画を立て、その経費五千弗の半分を三田（慶應義塾）中心に募集し、他の半分を当地在留同胞間より募集することを内約して来られたのでありました。

其後日本では既にその資金が出来まして先般ハワイ大学に二千五百弗送つて来ましたのでシンクレーア氏は我等在留同胞に他の半額の調達方を相談して来られたのでありますが、同胞社会と致しましてもかゝる文化事業を後援することには何等反対の理由もありませんので、こゝにハワイ大学当局の申出に応ずることゝなつたわけであります。

時節柄各自出費多端の折誠に恐縮ではありますが、同胞子弟が大多数を占めて居るハワイ大学の現状や、一般在留同胞の文化向上のために御同情下さつて、御後援賜らんことを希ふ次第であります。

ホノルル一九三八年六月

ハワイ大学日本文化特別講座後援会

小　規

□募集期間　一九三八年七月中

□御送金先　MR. KATSUZO　YAMAMOTO
P. O. Box1200　Honolulu, T. H.

□本会書記　渡辺七郎（ワイキキ日本語学校）

□本会会計　山本勝三（横浜正金銀行布哇支店）

□御照会の件　下記委員中何れにても御尋ね下さい

（以下に、委員五十二名の氏名と、英文の同一内容の趣意書が続くが、ここでは省略した。また、右記の和文の募金趣意書は総ルビであるが、ルビは省略し、また旧字を新字に改めた。）

この二つの資料から、計画具体化の出発状況と計画内容について、以下の六点が整理できる。

①計画の基本は、ハワイ大学に福澤講座と称する日本文化の特別講座を設置し、講師として、日本より権威者を招聘するというもの。

②計画具体化の出発点は、昭和十二年夏にハワイ大学東洋研究所長[5]シンクレーア氏が義塾を訪問し小泉信三塾長と協議したことに始まる。

③慶應義塾の認識では、この計画は、シンクレーア氏を中心としたハワイ大学側の希望に義塾が協力するものであった。

④講座の設置期間については、ハワイ側と慶應の認識がズレていた可能性がある。慶應側の評議会記録では「大体初年度の経費に充当すべき寄付の申込を得たる次第を報告し」、と「初年度」という言葉を使っており、初年度以降も継続するものと考えていた。また、戦後の昭和三十五年八月にシンクレーア氏は慶應義塾より名誉博士号を授与されるが、その際の高村象平塾長の挨拶の中でも、福澤講座は「毎年日本から一人の学者を招聘するという計画」であったと紹介されており、[6]慶應側は継続する計画であったと認識していたと思われる。

一方、ハワイ側の趣意書では、「ハワイ大学に日本文化の特別講座（福澤講座）を一ケ年間設置し」とあり、少なくとも日系人・在留邦人が組織した同講座の「後援会」は、とりあえず一ケ年間のものと発表していた。

⑤経費は、一ケ年五千ドルであり、半分の二千五百ドルは慶應義塾が募金をする。

⑥残る半分の二千五百ドルはハワイ側で調達する。結果としてはハワイ大学が日系人・在留邦人に募金を依頼する形になった。

福澤講座の計画協議までの経緯

計画の概要は以上のようなものだが、この計画を進めたハワイ大学側担当者シンクレーア教授（Prof. Gregg M. Siclair）とは、どのような経歴の持ち主で、なぜ昭和十二年夏に慶應義塾に、この計画をもちかけたのだろうか。

先にも述べたように、シンクレア教授は、昭和三十五（一九六〇）年八月に義塾より、名誉博士号を授与されている。その際の資料[7]によれば、教授は、一八九〇年にカナダのオンタリオ州に生まれ、ミネソタ大学（B.A.）、コロンビア大学（M.A.）を卒業した後に、一九一二年から一五年に京都中学で、また一九二三から二六年には彦根高等商業学校で英語教師を歴任した。その後、一九二八年から三六年まで、ハワイ大学で英文学の教鞭をとり、外国文学、特に日本文学に興味を持ち、世界文学史の講義を担当したという。つづいて、一九三六（昭和十一）年には、ハワイ大学に東洋研究所（Oriental Institute）を設立し、その所長に就任し、さらに一九四二年から五五年まで、ハワイ大学総長（五五年、定年退職）を勤めている。また、名誉博士号授与の際、当時の高村象平塾長は、シンクレーア教授を「日本についての研究者であり……日本文学に大きな関心を示された」学者であり、また「福澤諭吉を日本の知的指導者としてのみでなく世界に於ても有数の指導者であると認識した最初のアメリカ人学者の一人」と紹介している。

ところで、昭和十一（一九三六）年に、訪問教授としてハワイ大学に招聘されていた清岡暎一氏の当時の報告によれば、ハワイ大学は、「其の当初から東西両文化の融合を主旨として創立せられた。従ってその科目も東洋

研究に重きを置いている。[8]」という姿勢を持った大学であった。また同氏は、「昨年（筆者注、昭和十一年）オリエンタル・インスチチウトと云うものが大学内に出来、これが東洋関係の教授の統制と学生の科目選択の指導をすることになり、新しい事務室まで造って活動の用意をしていた。[9]」とも伝えている。つまり、上述のシンクレーア教授が、協議のために慶應義塾を訪問した昭和十二年夏は、このような目的を持った東洋研究所が設立されてから、まだ一年しか経っていない時期であった。このことから、同研究所の初期の事業の一つとして、福澤講座が計画されたものと考えられる。

しかし、それでは何故、ハワイ大学は、慶應義塾を協力相手に選んだのだろうか。次の年譜は諸文献・資料に基づいて、戦前のハワイ大学と慶應義塾の関係を整理したものである。この年譜を参考に、福澤講座計画が慶應義塾に持ち掛けられた経緯を考えてみよう。

ハワイ大学と慶應義塾の交流年譜

一九三五.	ハワイ大総長、清岡暎一氏へ来講依頼[10]	
一九三六.	ハワイ大 Oriental Institute 設立[11]	（一月）日本、ロンドン軍縮会議よりの脱退を通告
一九三六.一.三十.	清岡暎一氏、ハワイへ向け横浜出帆[12]	（二月）二・二六事件
一九三六.二.二十.	清岡暎一氏、ハワイ大学着任[13]	
一九三六.八.十九.	ハワイ大学副総長、ケラー博士来塾。塾長理事その他と会談[14]	
一九三六.八.二十九.	小泉塾長、ハーバード大学創立三百年祭出席の途上ホノル	

	ルに寄港、現地三田会が港に迎える。ハワイ大総長クロフォード氏と面会[15]	
一九三六・九・	清岡暎一氏帰国[16]	
一九三六・十一・十七・	小泉塾長、帰途ホノルルに寄港。シンクレーア教授、小泉塾長をホテルの午餐に招く。クロフォード氏と面会。三田会の招宴[17]	
一九三七・夏	シンクレーア教授、塾を訪問。福澤講座について小泉信三塾長と協議	（七月）盧溝橋事件（日華事変始まる）
		（十月）ローズベルト米大統領、日独を好戦的と批判する演説
		（十一月）『三田評論』で塾教職員戦死の最初の報告。日独伊防共協定成立
一九三七・十二・二十一・	慶應義塾評議会で、福澤講座の計画について報告[18]	
一九三八・六・	福澤講座後援会、ハワイ在留同胞へ募金の呼び掛け その際に慶應義塾からは、すでにハワイ大学へ二千五百ドルの分担金が送金されて来ている旨を唱える[19]	（四月）国家総動員法公布
		（九月）国際連盟、制裁規定の日本への通用を決議
		（九、十月）『三田評論』、塾員戦病死者四名を報告
一九三八・十二・七・	福澤講座日本側負担費用の出資者の見込みがある旨が、慶應義塾評議会で報告される[20]	（十二月）米国、国民政府への二千五百万弗の借款供与を発表。米国務省、日本への道徳的禁輸勧告を始める

一九三九・九・	福澤講座後援会より二千六百八十六ドル五十八セントをハワイ大会計課へ引き渡す[21]	(一月～六月)『三田評論』、塾員戦病死者二七名を報告 (五月)ノモンハン事件
一九三九・十・二十一・	ハワイ大クロフォード総長より、ハワイ大上原征生氏へ福澤講座基金寄付についての感謝状[22]	(七月～十二月)『三田評論』、塾員戦病死者十七名を報告 (七月)アメリカ、日米通商航海条約破棄を通告
(一九三九・)	慶大蹴球部ハワイ遠征の内定あるも、文部省不許可のため実現せず[23]	(九月)欧州で第二次世界大戦始まる (十一月)野村・グルー日米会談開始
一九四〇・七・七・	慶大野球部遠征のためハワイ着[24]	(一月～六月)『三田評論』、塾員戦病死者十五名を報告
一九四〇・七・十・	慶大野球部ハワイ大学訪問、総長に面会、東洋研究所見学[25]	(一月)日米通商航海条約失効　日米無条約時代に入る
(一九四〇)	野口米次郎教授、ハワイ　福澤講座出講予定であったが、実現せず[26]	(七月～十二月)『三田評論』、塾員戦病死者九名を報告 (九月)北部仏印進駐　日独伊三国軍事同盟締結

実は、この年譜に見るように、シンクレーア教授が昭和十二（一九三七）年夏に、福澤講座計画について協議するために慶應義塾を訪れる前から、義塾関係者とハワイ大学は、何度か接触があった。そのなかでも、特に注目すべきものは、当時予科教員であった清岡暎一氏が昭和十一（一九三六）年二月から半年間、訪問教授としてハワイ大学に出講したことだ。このことを、当時の『三田評論』は次のように報告している。[27]

大学予科教員清岡暎一君は曩に「福翁自伝」の英訳を完成して欧米各国の読書界に嘖々たる好評を博したが、最近ハワイ大学総長ディ・エル・クローフォード氏は同君に鄭重なる書翰を寄せ、久しく我国に在留せる聖公会のビショップ・マッキム師より同君の令名を伝聞したがハワイ大学に於て一年もしくは半年間、訪問教授（Visiting Professor）として日本文化及び他に一科目随意の題目に就て講義せられたいと懇請して来た。同君は先年コロンビヤ大学に於て日本文化を講じ日本語を教授した経験もあり義塾の同意を得て其招聘を快諾することに決し、来春匆々渡布し二月二十日より六月二十三日まで同大学に於て講義する予定である。

ハワイ大学では、先にも述べたように東洋研究を重視しており、大正九（一九二〇）年に前同志社大学総長であった原田助氏を教授として招いた。同氏は十余年間にわたり、日本歴史を教えていたが、清岡氏が出講した当時には、すでに引退帰国していた。この原田氏の後任はなかなか見つからず、ハワイ大学では、時折訪問講師を迎えるようになり、柳宗悦氏や蠟山政道氏が、清岡氏以前に招聘されていたという。[28]

ところで、先の『三田評論』の報告では、清岡氏をハワイ大学に紹介したのは「聖公会のビショップ・マッキム師」となっているが、同師は日本に五十年も住んでいた宣教師であり清岡氏とも親しかったのである。[29] 今年

（平成七年）の十月に清岡氏から、この間の事情を伺ったところでは、まずマッキム師より打診があり、その後、ハワイ大学のある教授が清岡氏宅を訪問し、清岡氏の人物能力を試した上で、出講を依頼したという。[30] 上記の『三田評論』の記事にあるハワイ大学総長からの招聘書簡は、その後の正規の依頼ということになる。このように、清岡氏のハワイ大学出講は、慶應義塾を通したものではなく、いわば同氏の個人的能力とコネクションにより実現したものであった。

清岡氏は昭和十一（一九三六）年一月三十日に大洋丸で横浜を出港し、[31] 二月より六月まで、ハワイ大学で「日本文化史」、「日本語教授法」、「現代日本の指導者」の三科目を講義し、さらにその後、サマーセッションの講義も依頼され、八月まで彼地の教壇に立った。[32] 同氏は既に、昭和九年に『福翁自伝』の英訳を完成出版しており、またハワイ大学においても、「福澤諭吉について半年間、英語で話し」たという。[33] 清岡氏によれば、当時のハワイは、「二・二六事件がおこり、日本は軍国主義の国だといわれ、弁護するのに困りました」[34] というような状況であった。こうした中で、福澤諭吉ならびに清岡氏自身のリベラルな思想は、ハワイ大学で好感をもって迎えられたに違いない。

また、清岡氏の、このハワイでの活動が、同年に設立されたばかりの東洋研究所の所長に就任したシンクレーア教授に影響を与え、福澤諭吉や慶應義塾へ目を向けさせたのではあるまいか。先に引用した昭和十二年の評議会議事録では、シンクレーア教授が「福澤先生に私淑し」ていたことが、福澤講座計画の発端の一つと説明されている。本当に「私淑」していたかどうかは、ともあれ、「日本語はできなかった」[35] というシンクレーア教授が、福澤諭吉を語るには、翻訳紹介者が必要だ。ハワイでの清岡氏の活動がその役割を果たしたことは、かなり可能性が高いと言うべきである。

さて、ハワイ大学では、清岡氏の招聘を経験し、それ以降も日本からの訪問教授受け入れを、毎年行いたいという意向があった。この点について、清岡氏に後任を捜して欲しいとの希望が表明されていたという。また、清岡氏のハワイ滞在中に、シンクレーア教授は、東洋研究所として、「何とか外国との交流を組織したい」と考え、清岡氏に相談をしていた、ともいう。しかし、後任の件は、「英語を十分に話せる人は少なかったし、交渉の手紙をマメに書く人も日本に少なかったために、なかなか進展しなかった」のである。[36]

しかし、この清岡氏の出講を機に、ハワイ大学と慶應義塾の接触は、次第に密になってくる。まだ清岡氏がハワイに滞在していた昭和十一（一九三六）年八月十九日には、ハワイ大学副総長ケラー博士が来塾し、小泉信三塾長および理事と会談をしている。会談の具体的な内容は伝えられていないが、「本塾予科教員清岡暎一君が訪問教授として日本文化史の講義を行っているので会談は種々の話題に賑った」と報告されている。[37] 清岡氏の存在が、接着剤の役割を果たしていたことが想像される。

また、このすぐ後には、小泉塾長が、ハーバード大学創立三百年祭出席のために、八月二十一日、龍田丸で横浜を出港し、十一月二十六日帰国の予定で渡米の途についた。[38] 塾長は往復ともに、ホノルル寄港の際にハワイ大学を訪問し、同大学総長クロフォード氏と面会し、また復路の時にはホテルにシンクレーア教授の訪問を受けている。[39] その状況を、塾長は「ワイキキの海浜、ロオヤル・ハワイヤン・ホテルに投ず。ハワイ大学の教授シンクレヤア君来りて予等を付近の別のホテルに午餐に招く。その説に曰く、ハワイ大学の使命とすべきもの三あり。熱帯農業の研究をなすこと、人種混合の研究をなすこと及び東洋研究をなすこと、是なり。東洋研究は米本国にも盛んなれどもハワイ最も地の利を得たり云々と」と記している。[40] ハワイ大学の東洋研究をアッピールしようというシンクレーア教授の熱意を、塾長が感じていたことが、行間に読み取れる。

このような、前史があって昭和十二年夏の、シンクレーア教授の来塾、小泉塾長との福澤講座計画協議に至るのである。ただし、こうした計画への発展は、清岡氏の話では、シンクレーア教授など、特定の個人の功にのみ帰せられないもので、「周りで、どんどん話が進んでしまった」というのが、実態であったという。しかし、ともあれ、来塾した際にシンクレーア教授は、清岡氏に再会し、その別れ際、「三田の大学から裏門の方へ下りてゆく坂道の途中で、握手をして、これからどんどん（福澤講座計画を）やってゆく」と張り切っていたという。[41]

慶應義塾側での福澤講座への準備の進行

このようにして、始まった計画で、まず最初の課題は、ハワイ大学と慶應義塾の双方が、二千五百ドル（当時のレートで約八千円）[42]づつの基金を募ることであった。当時の日本では、大卒銀行員の初任月給が、七十円（昭和十二年）、大学文科系授業料が慶應で百四十円、早稲田で百六十円（昭和十二年）[43]、また横浜・サンフランシスコ間の片道船客運賃の平均が二百円程度（昭和十三年、日本郵船）[44]の時代である。二千五百ドルという金額は、日本側にとっては初任給の百倍を越えるものであった。

慶應義塾側は、計画が発議された昭和十二年の年末までには、前掲の評議会議事録に「大体初年度の経費に充当すべき寄附の申込を得たる次第を報告し」、とあるように寄附申し込み者の一応の目安はつけていた。しかし、この目安はすぐには具体化しなかったらしい。その一年後の昭和十三（一九三六）年十二月の評議会でも、次のような報告が行れている。[45]

布哇大学ニ於テハ其ノ地理的位置環境ヨリ予テ熱帯農学、民族性心理学、東洋研究ノ三特色ヲ有スル大学タランコトヲ目標トシ来リシカ、同大学東洋研究所主任シンクレア氏ハ予テヨリ福澤先生崇拝者ニシテ昨年来朝セル際、福澤先生ノ名ヲ冠シタル「福澤講座」新設ノ希望アルガ之ニツキ日本人ニテハ何人ニ相談セネバナラヌカトノ質問ニ対シ、福澤先生ノ事ニ関スル以上先ヅ我々ニ於テ聴カント答ヘタルニ該講座ニ於テハ日本ノ東洋研究の成果ヲ講ズル外ニ公開講演等ヲモ行フベク就テハ日本ヨリ学者招聘ノ費用トシテ年額五千弗ヲ要スルガ半額ハ布哇大学ニテ調達スベキニ依リ他ノ半額二千五百弗（約八千円）ヲ日本側ニテ心配アリタキ旨相談アリ、恰モ事変勃発後ノコトナリシガ最初ノ日本側負担費用ハ不取敢出資セントノ有志者アルヲ以テ実現ノ日モ遠カラザルベク、其ノ時ハ先ヅ講師ヲ義塾教授中ヨリ選ビ追テ他ノ大学ニモ及ボス考ナリ。

この報告では、「恰モ事変勃発後ノコトナリシガ」と、この計画へ寄付を募るには難しい情勢を指摘し、それにも拘わらず「日本側負担費用ハ不取敢出資セントノ有志者アルヲ以テ」、計画は実現するだろうと述べている。言い換えれば、前回の評議会から一年が既に経ったが、寄付はまだ受領しておらず、依然として見込み段階であったのである。

この遅れが、何によるのか。あるいはハワイ側の進捗状況を睨らんで、歩調を合わせていたのかもしれないが、むしろ、考えられるのは日華事変の影響だろう。前掲の年譜に記したように、福澤講座計画発議の昭和十二（一九三七）年七月には、日華事変が勃発。十月にはローズベルト米大統領がシカゴでいわゆる「隔離演説」を行い、日独を好戦的と批判している。秋になると『三田評論』にも、事変関係の記事が目立つようになる。同誌十月号には入隊した義塾教職員五十四名の氏名が公表され、また十一月号からは「事変関係特別報告」という欄が設け

られた。その初回では、慶應義塾関係の最初の戦死報告として医学部助手の追悼記事が出ている。また、十一月号の同欄では教職員二十七名、学生十五名、塾員百名の入隊者氏名が、さらに十二月号では教職員五名、学生一名、塾員七十九名の入隊者氏名が公表されている。その後の『三田評論』誌上で公表された事変関係の記事のうち、戦死者数のみは、年譜に記しておいたが、それ以外にも、慶應義塾関係の多くの戦傷病者や入隊者の氏名が毎号のように報告されるようになったのである。一方、日本の軍事行動に対して、アメリカは次第に批判を強め、昭和十三年十二月には、国民党政府への援助に本格的に乗り出している。このような状況の下で、アメリカの大学であるハワイ大学との協力計画の進捗スピードが、多少鈍ったことは想像にかたくない。また、このような状況が昭和十三年十二月の評議会記録で、「恰モ事変勃発後ノコトナリシガ」と簡潔に述べられていることの含意ではないだろうか。

ハワイ側での福澤講座への準備の進行

一方、ハワイ側での募金への初動が資料の上で確認できるのは、慶應義塾より遅れ、福澤講座計画発議から一年近く経ってからだ。この間に、どのような試みがあったか分からないが、ハワイ大学は、結局、日系人・在留邦人社会に募金を依頼した。この依頼に応じて、「ハワイ大学日本文化特別講座後援会」の名称で、昭和十三(一九三八)年六月に出された呼び掛け書が、前掲の「福澤講座への募金呼び掛けの趣意書」(F1)なのである。

ところで、この趣意書には奇妙な所がある。文中に「日本では既にその資金が出来まして先般ハワイ大学に二千五百弗送つて来ました」と述べている点だ。既に述べたように、これより半年後の十二月に至っても、慶應義

塾側は寄附者の見込みを持っているのみであり、寄附の受領はしていないし、ましてやハワイ大学への送金もしていない。それにも拘わらず、すでに送金があったかのように書いているのは何故だろう。ハワイ大学と後援会との間で誤解があったか、あるいは募金の切迫性を示すための演出だろうか。

だが、どちらにしても、六月付けで趣意書を出し、募金期間を翌月の七月いっぱいに設定していることからして、ハワイの後援会は、かなり急ぎの募金を考えていたようだ。あるいは福澤講座の実現を、翌十四（一九三九）年二月からの春学期に想定した募金日程だったのかもしれない。しかし、思ったようには、募金は進まなかったらしい。ようやく集まった募金二千六百八十六ドル五十八セントが、ハワイ大学に引き渡されたのは、募金開始から十五、六ヶ月も経った、昭和十四年九月か十月頃のことなのである。このことはクロフォード学長から、後援会委員でかつハワイ大日本語教員であった上原征生氏へあてたつぎの感謝状（F2、原文は英文）などから明らかである。[46]

一九三九年十月二十一日　ハワイ大学　上原征生氏あて

拝啓　上原　様

ハワイ大学と東洋研究所になりかわり、私は、貴兄ならびに後援会委員諸兄、また委員諸兄の呼び掛けに応じ、東洋研究所福澤講座のために、寛大にも二千六百八十五ドル五十八セントの基金を提供して下さった皆様に感謝を表す次第であります。私共は、当地の皆様の御理解ならびに御支持に接し、大変にうれしく存じております。これにより、福澤博士（Dr. Fukuzawa）を記念した講座の設立をかねてより望んでいる

日本の友人諸氏からの協力寄附を、受け入れることが出来るようになります。シンクレーア教授ならびに私は、直ちに、この基金により近日中に本学講義に招聘するに適切なる人物の選考に、取りかかろうとしております。

貴兄ならびに寛大なる貴兄の友人諸氏に深甚なる感謝を表します。

敬具

学長　D．L．クロフォード

ところで、二千五百ドルという金額は、莫大というわけではないが、アメリカにおいても決して少ない金額ではなかった。アメリカの管理的職業従事者の平均年間所得が二千百三十六ドル（一九三九年）、また全世帯の七十四％の世帯所得が二千ドル以下（一九三五～三六年）であった当時である。[47] こうした額の募金の中心になった日系人・在留邦人とは、どのような人々であり、何故このような協力をしたのだろうか。

前掲の「福澤講座への募金呼び掛けの趣意書」（F1）引用個所では省略をしたが、同趣意書には、五十二名の委員氏名が載っている（内二名は印刷がかすれ判読できない）。これらの氏名について、昭和十二年ならびに十六年の『日布時事布哇（ハワイ）年鑑』[48] ならびに、昭和十三年の『慶應義塾塾員名簿』[49] で調べたものが、次表（百八十、百八十一ページ）である。

この五十二名の委員ないしその配偶者の職業は、表に示した通りだが、それらを整理すると、医師・歯科医…七名、報道・出版…七名、現地の金融・保険会社社員…七名、教育関係…五名、商業…五名、司法関係…三名、建築土木関係…二名、日本企業ハワイ駐在社員…五名、日本企業現地採用社員…一名、その他…五名、不明…五

名となる。当時の調査によればハワイ日系人十五万千百九十九名の内、農林漁業およびその労働者が約四十五%、職人を含む工場、運輸、家事などの肉体労働者が約三十%を占めていた。[50] これに比較すると、後援会委員の職業は明らかに高学歴を必要とするもの、ならびに経営者、ホワイトカラーに集中している。

なお、氏名の頭の＊を付してある者は、『日布時事布哇年鑑』の人名住所録で、太字大文字で記載されているものである。このような者は名簿中では、四、五十名に一人であり、『年鑑』に何らかの特別氏名記載料を払った者と考えられる。つまり広告の必要が有る者か経済的に豊かであった者達である。

また、表には記さなかったが不明五名の他一名を除けば、残りの者は全てホノルル居住者であった。さらに、不明者と日本企業ハワイ駐在社員を除いた四十二名の内、一世は二十四名、ハワイ生まれが十八名である。

これらのことから、後援会委員の性格を考えれば、ホノルル在住の比較的高学歴者ないし経済的成功者が中心で、一世のほうが多いものの、ハワイ生まれの者も四割余りいる、ということになる。これに、日本企業のハワイ駐在社員を合わせたものが後援会委員の全貌である。

ところで、これらの後援会委員をはじめとして、日系人・在留邦人が募金に協力した理由として、二つのことが考えられる。第一は、日系人が置かれていた教育環境である。当時、日系人は十五万人前後でハワイ全人口の四割近くを占めていたが、[51] 次第に一世は減少し、四万人程度になっていた。[52] この変化とともに、二世以下の日本語教育や日本文化へのアイデンティティー維持の問題が生まれていたと考えられる。

この問題への対策の一つが日本語学校であり、昭和十一年当時、ハワイ全島には二百ばかりの日本語学校があった。[53] しかし、アメリカ政府は、第一次大戦後の外国語学校取締法のような弾圧はしないまでも、この種の学校を公認してはいなかった。[54] 当時、清岡氏は、「政府としては、日本人その他を完全にアメリカ化せしめる政策

福澤講座後援会委員一覧

氏　名	出生地	出身県	職業	塾員卒業年
安達　正倖	H生	熊本	横浜正金銀行員	
芦野　　正		東京	日本郵船会社支店長	
＊淵野　平吾		佐賀	土木建築設計	
＊古川　茂生		山口	日布時事広告部長	
後藤　安雄	H生	熊本	ハワイ大学農科嘱託	
＊橋本　萬槌		山口	精々堂支配人	
星野　光春夫人	H生	東京	医師（夫の職業）	
林　　守夫	H生	東京	歯科医	
＊今井　友三		広島	太平洋醸造会社長	
＊今村　寛猛		福井	本願寺主任開教師	昭和6年　文学部卒
石坂　主郎		東京	日本郵船社員	大正10年　理財科卒
？判読不能？				
＊岩原　竹登		広島	岩原商店主	
＊香川　武雄	H生	広島	セキュリティー保険会社支配人	
＊片桐　政利	H生	山口	ホーム保険社員	
＊勝沼　富造		福島	獣医	
木村　秋雄	H生	山口	医師	
牧野金三郎		神奈川	布哇報知社長	
＊丸本　正二	H生	山口	弁護士	
＊松井登太郎		滋賀	太平洋銀行支配人	
御旗　義登				
＊諸橋　　宏		東京	横浜正金銀行支配人	
＊毛利　伊賀		石川	医師	
＊中野為次郎		福岡	建築請負業	
＊中川　静子	H生	広島	公立校教師	
小田　義衛	H生	山口	ファクタス会社員	
＊小野　義人		東京	布哇住友銀行支配人	
＊佐藤　太一		山口	佐藤服装店（布哇教育会常務理事）	
島村　佳徳	H生	熊本	判事	
＊相賀安太郎		東京	日布時事社長兼主筆	
＊相賀　重雄夫人	H生		日布時事英文記者（夫の職業）	
曽川　政男		広島	布哇新報社長	

氏　名	出生地	出身県	職業	塾員卒業年
＊住田　代蔵		広島	住田商会社長	
末岡ジョージ夫人				
＊龍渓　玄深		福井	布哇中学校校長	
＊田原治久馬		広島	歯科医	
時岡　政幸		岡山	国際信託支配人	
？判読不能？				
＊当山　哲夫		沖縄	実業之布哇社長	
土屋　精一		神奈川	商業時報社	
＊築山　長松	H生		市郡検事	
＊築山清之助		東京	ジャパニーズ バザー支配人	大正10年　特選塾員
角田　健作		群馬	会議所書記	
植田　　勝	H生	広島	歯科医	
上原　征夫	H生	熊本	ハワイ大学日語教師	
内田　金二		東京	医師	
若山喜代松	H生	広島	金融会社員	
＊渡部　七郎		福島	ワイキキ日語校長	
＊弥永　勝利	H生	福岡	セキュリティー保険会社副支配人	
＊山本　勝三		三重	横浜正金銀行副支配人	大正8年
吉田　桃枝				
＊山懸　太助	H生	山口	ハワイ銀行員	

（＊は『日布時事布哇年鑑』の人名住所録の中で大文字表記されている者。「出生地」欄の「H生」は、ハワイ生まれを示す。）

をとっている。例えば日本人の経営する日本語学校など全然学校として認めない方針である」[55]、と観察している。また、こうした状況だからこそ、むしろ子弟を日本で教育しようという志向も出てきていた。昭和十二年版『布哇年鑑』は、「近年日本留学熱盛んとなり日系市民にして日本で中等教育、師範教育を受けて帰布するもの多く」[56]と報じている。

しかし、当時のこのような教育環境の中で、ハワイ大学は州立の公教育機関でありながら、政府の干渉を受けておらず、「日本人がその特性を失はぬやう、アメリカ人こそ日本人の特長を学ぶべきであると公然主張している」[57]大学だった。しかも、一九三七年の卒業生の三割五分が日系学生であり、また当時の在学生の五割を日系人学生が占めていた大学でもあった。[58]福澤講座は、このような大学が、さらに日本文化についての教育を充実させようという一計画であったのである。これが、日系人が、同計画を積極的に後援をした理由の一つだろう。

考えられる第二の理由は、現地在住塾員（慶應義塾卒業生）の協力である。昭和十三年の『慶應義塾塾員名簿』で調べたかぎりでは、後援会委員の内、塾員は表に卒業年を示した四名のみである。しかし、後援会の会計を担当したのは、塾員の山本勝三氏（横浜正金銀行ハワイ支店副支配人）であり、後援会の中心人物の一人が慶應関係者であったことは、注目すべきだろう。[59]また、後援会委員以外に、当時ホノルルにどの程度の塾員が在住していたかは未調査だが、三田会（塾員の同窓会）に準ずるグループは存在していた。[60]想像ではあるが、これらの塾員が募金に協力したことは、考えられないことではないだろう。

ともあれ、以上のような人々の意図と活動により、前述のように、昭和十四（一九三九）年十月までには二千六百八十六ドル五十八セントの基金が集められ、ハワイ側では福澤講座の資金面での準備が整ったのである。

福澤講座計画の挫折

昭和十四（一九三九）年十月に、ハワイ側の基金が用意できたということは、福澤講座の開講は、早くて翌十五年の春学期であり、人選などに手間取れば、十五年秋学期となる。しかし、この時期になると、日米関係は一段と悪化していた。年譜にも記したように、昭和十四年七月にはアメリカが、日米通商航海条約破棄を予告。さらに、福澤講座開講が可能となる十五年一月には、安政の開国以来初めて、日米間無条約状態に入ったのである。

また、ハワイと慶應義塾との交流にも、日本政府による規制が加わる場合が出て来たらしい。例えば、昭和十四年には、慶應義塾の蹴球部のハワイ遠征が内定していたが、これは文部省の不許可のため実現しなかったという。[61]

しかし、このような状態であるにもかかわらず、講師の人選は進められた。その結果、昭和十五年に出講する最初の講師として、米国生活経験の豊富な詩人であった野口米次郎慶應義塾大学英文科教授が選ばれた。[62] この人選は、ハワイ大学でも了解していたようだ。[63] しかし、結局、「頃日日米関係益々不安な情勢となり、野口氏の来任も延期となってしまいました」[64] と後に福澤講座設立後援会書記の渡辺七郎氏が説明されたような事情により、野口氏の出講は実現せずに終わったのである。

ところで、後援会書記渡辺七郎氏は、戦後の昭和三十一年にハワイ大学に保管されていた福澤講座の基金は「元利合計三千五百八十一弗四十七仙」であると報告している。[65] この金額はハワイ側が集めた二千六百ドル余りの基金に利子が加算されたものである。とすると、慶應義塾側の二千五百ドルはどこに行ったのだろうか。

一つの可能性として、基金が集まらなかったということが、考えられないわけではない。たしかに、慶應義塾経理課に保管されている昭和十二年から十五年までの経理報告書を調べたかぎりでは、福澤講座への指定寄附と考えられるものはない。しかし一般寄附を流用することも可能であり、また講師の人選まで済んでいたのだから、たとえ寄附がなかったとしても、義塾当局は基金のめどはつけていたと考えるべきであろう。

もう一つの可能性は、ハワイ大学への送金ができなくなったということだ。残念ながら当時の海外送金に関する経理課の資料は全て失われており、送金の有無を確認することはできなかった。しかし外国為替管理法の下で、昭和十二（一九三七）年一月からは、輸入為替許可制が導入され、その後の戦時体制の進展と共に、為替の認可は厳しさの度を加えていったという。[66] このような状況の下で、昭和十四年から十五年にかけての時期には、送金が難しくなっていた、ということは十分に考えられるだろう。

ともあれ、戦前には福澤講座はついに実現しなかった。戦前における、ハワイ大学と慶應義塾の最後の交流となったのは、昭和十五年七月の慶應義塾野球部のハワイ遠征であった。彼等が、品行においてもスポーツにおいても、「清涼剤」ともいえる若者らしい爽やかな印象を、ハワイに残したことが報告されている。[67] 本来であれば野口教授が行くはずであったハワイ大学東洋研究所を戦前で最後に訪れたのも彼等であった。ハワイ大学を訪問した、一選手はその感想を以下のように記している。[68]

「全員打ち揃って総長に面接、総長は若々しい、しかも慇懃な態度で吾々に対せられた。……（中略）……此の大学の明朗なことは此の総長に於て十分に窺はれる。」

「総長に面接の後ち吾々は二人のプロフェッサーに案内され構内を見学した。……（中略）……構内を一巡

して特に目をひいたものは、ライブラリーの完備していることであった。東方学院（筆者注：東洋研究所のことであろう）には日本の文献二万部、支那の文献三万部が収められている。……（中略）……また学生達のパブリック・マインドが発達していることなどは吾々の大いに学ぶところがある」

この感想には、福澤講座挫折の背景となった緊迫した日米関係を忘れさせるような、若者らしい素直で肯定的なハワイ大学評価が出ているといえるだろう。

福澤講座実現と野村教授の出講

福澤講座計画は、上述のような諸般の情勢により、戦前にはついに実現をしなかった。しかし、戦後も十年を経た昭和三十（一九五五）年になって、ハワイ側からこの計画の実現へ向けての働き掛けが再開した。この年に、かつて福澤講座後援会委員の一人でもあったハワイ大学日本語教授上原征生氏が、慶應義塾を訪れ、計画完遂を協議したのである。これを機に、準備が再開したが、昭和十五年に出講することが内定していた野口教授は、すでに二十二（一九四七）年に亡くなられており、結局、日本経済史、日本経済思想史の第一人者であった野村兼太郎教授が、昭和三十一（一九五六）年に出講することになったのである。

このようなことで、福澤講座は、昭和十三（一九三八）年から足掛け十九年間を経て、ようやく実現のはこびとなった。ここに至るまでの経緯を、ハワイ側の福澤講座後援会書記渡辺七郎氏は、つぎのような書面（F4）で委員・後援者へ報告している。[69]

一九五六年十月

布哇大学日本文化特別講座（福澤講座）設立委員書記

渡辺　七郎

拝　啓

一九三八年六月　当地で日本文化の理解を高める目的を以て布哇大学日本文化特別講座（福澤講座）設立委員が組織され皆さまの御後援を得て翌一九三九年九月までに二千六百八十六弗五十八仙の基金が集まり全額を布大会計課に引渡し将来此の目的のみに使用する条件の下に保管してありました。

一九四〇年講師として野口米次郎博士が来任されることに決定しましたが、その頃日米関係益々不安の情勢となり野口氏の来任も延期となってしまいました。ここまでの成行き及当時の会計報告はその都度御報告申上げておいた通りであります。

一九四一年十二月遂に日米国交断絶となり此の問題も立消えとなって今日に至って居りましたが、布大会計課保管の基金は今日までに元利合計三千五百八十一弗四十七仙になって居ります。

日米国交回復と共に布大当局は日本文化講座設立の目的遂行を考慮し昨年上原征生教授渡日の折慶應大学当局と折衝して同大学教授野村兼太郎博士が一学期間の任期で来任されるに至った次第であります。野村教授は経済学博士で大学では日本経済史と日本経済思想史を担当して居られ、外部の色々な会合にも講演を依頼されて居ります。

さてこれで永年に渡る問題の解決を見るに至った次第でここに当時御奔走下さいました委員各位並に御後援下さいました皆様に御報告申上ぐると共に更めて感謝の意を表します。

敬具

後掲の「戦後のハワイ大学と慶應義塾の交流年譜」に記したように、野村教授は昭和三十一（一九五六）年九月十八日に羽田を立ち、半年の予定でハワイ大学に出講した（帰国は翌年二月十六日）。またその間の費用として、教授は、ハワイ側基金の元利合計三千五百八十一ドル四十七セントの支払をハワイ大学から受け取っている。[70] ただし、慶應義塾側負担分の二千五百ドルが、戦前の約束どおり、何らかの形で支出されたか否かは、明らかでない。

ハワイ大学で、野村教授は、「日本経済史」（"Economic History of Japan"）と「日本経済思想史」（"History of Economic Thought of Japan"）の二科目を担当した。二科目といっても、それぞれが一週間に三回（一回五十分）であり、一週に計六クラス分の講義をしたことになる。ただし「日本経済思想史」は大学院レベルの科目で、学生と相談の上、金曜日の午後に集中して行ったという。[71] また、この講義は英語で行われたが、野村教授は「二時間半の英語の講義は少なからず骨が折れる」と現地から報じている。[72]

しかし、このように、海外出講としては、比較的重い負担であったにも係わらず、野村教授は、「一週六時間の講義以外の時間は、勉めてハワイを知ることに努力した」[73] という。このハワイ研究について、教授自身は「結局計画の半分も果たし得ないでハワイを去らなければならなかった」[74] と残念がられているが、その成果は帰国後に四編の論文[75] として発表された。半年の講義の間を縫って、教授が、多くのものを吸収されていることがわかる。福澤講座のもう一つの成果というべきだろう。

ところで、野村教授の出講のみで、福澤講座は結局は、継続しなかった。その後も、後掲の年譜に示したように、ハワイ大学と慶應義塾の双方の関係者の接触はあり、何らかの提携が協議された様子も窺えるが、福澤講座という名称とシステムはついに継承されなかった。しかし、福澤講座の名称ではないものの、昭和四十三年まで

でも、米山桂三教授（昭和三十七（一九六二）年）と平松幹夫教授（昭和四十三（一九六八）年）が、それぞれ半年ずつ、訪問教授としてハワイ大学へ出講している。

戦後のハワイ大学と慶應義塾の交流年譜[76]

一九五五.	上原征生教授、福澤講座の目的遂行のため訪日、慶應義塾当局と折衝。[77]
一九五六. 九. 十八.	野村兼太郎教授ハワイ大学福澤講座出講のため羽田よりハワイへ出発。[78]
一九五六. 十.	福澤講座後援会書記渡部七郎氏、後援会委員へ経過及び野村教授来講の報告。[79]
一九五七. 一月頃.	野村教授、「福澤諭吉と日本の近代化」を講演。[80]
一九五七. 二. 十六.	野村教授、羽田空港着帰国。[81]
一九五七. 十月～十一月.	奥井復太郎塾長、ハーヴァード大ビジネス・スクール等を歴訪視察。その帰途、ハワイ大学に寄り、シンクレーア氏および、ウイルソン総長代理に面会。シンクレーア氏提案の慶應義塾創立百年祭案について会談。金原賢之助教授、小林規威講師同行。[82]
一九五七. 十一. 二.	奥井復太郎塾長、ハワイで上原征生教授と会う。[83]
一九五七. 十一. 二十.	金原賢之助教授、小林規威講師、ハワイ大学にディーン・ロバーツを訪問。ロバーツ氏は慶應との提携に積極的な関心を示す。[84]
一九五七. 十一. 二十一.	金原教授、小林講師、ハレクワ・ホテルにてシンクレーア氏と午餐。[85]
一九六〇. 八. 二.	慶應義塾、シンクレーア教授に名誉博士号を授与。[86]
一九六二. 二月～八月.	米山桂三法学部教授、ハワイ大学へ訪問教授として出講。[87]
一九六八. 九月～翌一月.	平松幹夫工学部教授、訪問教授としてハワイ大学へ。この際に、上原征生教授より野村兼太郎教授ハワイ大訪問記録の資料を受ける。[88]

野村兼太郎教授の講演「福澤諭吉と日本の近代化」について

今回、発見されたファイルにあった野村兼太郎教授の講演草稿、「福澤諭吉と日本の近代化」が、ハワイのどのような場で話されたものなのかは、残念ながら明らかではない。内容としては、どちらかと言えば、経済史というよりは思想史であるが、ハワイ大学での「日本経済思想史」の講義はゼミナール形式であったというから、[89] どうもこの講義の草稿とも思えない。前掲の「渡辺七郎氏の経過報告書」には、野村教授は、「色々な会合にも講演を依頼されております」とあり、また講演内容からも、むしろ、講義以外の場で行われた講演の草稿と、考えたほうが自然である。またタイプ草稿の頭には、"Delivered Jan.17, 1957" と手書きで日付が記入してあり、一九五七（昭和三二）年一月十七日に、どこかで配布されたか、あるいはこの草稿の保管者であったハワイ大学の上原教授に渡されたものと思われる。講演は、この前後に行われたのではないだろうか。

講演の内容は、極めて平易だが、野村教授の視角が明確に示されている。教授は、戦前より、明治維新前後における日本の西欧文化摂取の問題に大きな関心を寄せており、[90] この講演にも、そうした姿勢が見られる。

ところで、昭和三十一年当時の日本の学界の動向を思い起こしてみたい。当時は、どちらかと言えばマルクス主義史学の影響が大きく、明治維新前後の問題に関しては、戦前の日本資本主義発達史論争以来の段階規定にこだわる傾向が強かった。野村教授は、このような傾向には距離を置き、独自の歴史哲学・歴史理論に基づく実証主義史学で多大の成果を上げていた。また、思想史の分野で当時優勢であった見方は、江戸時代の思想の前近代性を指摘し、幕末―明治維新以後流入する欧米思想と伝統思想の断絶面を強調するものであった。しかし、野村

教授は、むしろ江戸時代の思想の発展の中に、明治以降欧米思想の受け入れを可能にした思想的準備が着々と進んでいた、と見ていた。つまり、教授は、早い時期からいわゆる「連続説」の立場であったのである。

今回発見の講演においても、野村教授は、「歴史には、何ら断絶はなかった」と、連続説の視角を明確に示している。また、たとえ蘭学や洋学がなかったとしても、また開国がなかったとしても、日本は自生的に発展し、思想面でも合理主義的傾向が成長しただろう、と見ている。

それでは、江戸時代の間に、何が思想の成長を齎らしたのだろうか。野村教授は三つの点を上げている。第一には貨幣経済の発展、第二には日本人の文化的特性としての現実主義と合理性、第三には身分的に圧迫された下士の抵抗心である。このような要因により生まれた合理主義者として、教授は、海保青陵の例をあげ、それを福澤諭吉の先駆と位置付けている。また、福澤が欧米の学問に興味を持ったのも、江戸時代にすでに合理主義的傾向が成長しており、福澤がそのようなものを吸収していたからこそである、と考えている。つまり、福澤が合理主義者であったから欧米思想を摂取したのであり、欧米思想が福澤を合理主義者にしたとは見ていない。

また、この講演で特に興味を引く見解は、福澤諭吉の独立の精神の起源を、欧米思想よりむしろ下級武士の抵抗心の中に求めている点だ。実証はなかなか難しい問題だが、この点でも野村教授は連続説の立場をとっている。この立場からすれば、個人の独立を唱えた明治維新以降の福澤の啓蒙活動も、欧米文化の単なる輸入者としての活動ではない。自生的に発展して来た独立精神の先陣を担い、それ故に欧米文化を理解できた先覚者の活動ということになる。

講演の最後で、野村教授は、個人の独立を日本の近代化に結び付けた福澤諭吉の思想を、現代に生かす道について述べている。昭和三十一年当時は東西冷戦の最中であった。東西対立下の世界の「野蛮」さに対して、真の

意味での独立の精神が、その救いとなる、と述べて講演を結んでいる。野村教授としては珍しい、時世に対する啓蒙的発言として、極めて興味深いものである。

「福澤講座」は、計画から戦争をはさんで、漸く二十年後に実現を見た。そこで、このような、「福澤講座」の名にふさわしい内容の講演が行なわれたことは、誠に意義深いものであったと思う。また最初に述べたように、本講演には、野村教授の歴史観が大変にわかりやすい形で語られている。そのような意味でも貴重な資料を紹介することができ、幸せに感じている次第である。

［付記］

本稿を書くに当り、今回はハワイ現地の資料・関係者の調査は全く行なわなかった。この点に関しては後日を期したい。

注

(1) このファイルは、旧図書館地階の三田文学ライブラリーから発見されたもので、ファイルの表紙には、「野村兼太郎教授ハワイ大訪問記録」とあり、「一九六八平松ハワイ大学出講に際して、上原征生教授より資料を受ける」と注記してある。

「平松」とあるのは、慶應義塾大学工学部の英語教授であった平松幹夫氏で、「慶應義塾報　第四〇四号」（昭和四三年一一月二五日発行）によれば、昭和四三年九月八日より、翌四四年一月下旬までの予定で、訪問教授としてハワイ大学に出講している。また、「上原征生教授」は、ファイル中の記述や、『日布時事布哇（ハワイ）年鑑』によれば、ハワイ移民一世で、戦前よりハワイ大学で日本語を教えていた者である。つまり、このファイルの書類は、ハワイ側で（例えば、上原教授の手元に）保管されていたものが、昭和四三年に平松教授に手渡され、その後どういう経路をたどったか、三田文学ライブラリーに紛れこんだものと思われる。

ファイルの内容を、年代順に示すと以下の通りである。なお、頭につけた番号は、本紹介文での説明の便を考えて、今回付けた史料番号である。

［F1］「ハワイ大学日本文化特別講座」への基金呼び掛けパンフレット（和文と英文）、「ハワイ大学日本文化特別講座講演会」発行、昭和一三（一九三八）年六月、一枚、一六四ページに原文掲載。

［F2］ハワイ大学学長クロフォード氏よりハワイ大学上原征生氏あて書簡（英文）、昭和一四（一九三九）年一〇月二一日、一枚、一七七ページに全文掲載。

［F3］ハワイ大学福澤講座設立委員会代表上原征生氏よりハワイ大学ブルース・ホワイト氏あて書簡（英文）、昭和三一（一九五六）年九月二四日、一枚。

［F4］ハワイ大学日本文化特別講座（福澤講座）設立委員書記渡辺七郎氏より設立委員ならびに同講座後援者諸氏への経過報告書（和文）、昭和三一年一〇月、一枚、一八六ページに全文掲載。

［F5］野村兼太郎講演“Yukichi Fukuzawa and the Westernization of Japan”草稿（英文）、昭和三二（一九五七）年一月一七日、一一枚、付録として全文掲載。

（2）『慶應義塾百年史』下巻、四六〇―四六三ページ。

（3）英文の趣意書では講座名は“The Fukuzawa Chair”とのみ表示されている。

（4）『慶應義塾百年史』下巻、四六二ページ。

（5）ハワイ側趣意書（和文）では「東洋科長」と訳されているが、英文の趣意書では“director of the Oriental Institute”であり、現代の訳語としては、「東洋科」よりは東洋研究所と訳すのが一般的である。本稿でも以下では東洋研究所という訳を採る。

（6）「グレッグ・エム・シンクレア博士名誉学位授与関係書類」、〔旧規定による名誉学位関係書類（1）〕所収、慶應義塾総務部所蔵。

（7）同上。

（8）清岡暎一、「ハワイ大学の日本研究」、『三田評論』四七八号、昭和一二年六月、一〇ページ。

（9）同上、一三ページ。

(10) 同上、一〇ページ。
(11) 同上、一〇ページ。
(12) 「清岡暎一君出発」、『三田評論』四六二号、昭和一一年二月、八ページ。
(13) 「清岡暎一君ハワイ大学より招聘される」、『三田評論』四五六号、昭和一〇年八月、三ページ。
(14) 「布哇大学副総長ケラー博士来塾」、『三田評論』四六八号、昭和一一年八月、六〇ページ。
(15) 小泉信三、「渡米日記（一）」、『三田評論』四七三号、昭和一二年一月、八ページ。
(16) 『回想八十年　清岡暎一君聴き書』、福澤諭吉協会、平成元年六月、七七ページ。
(17) 小泉信三、「渡米日記（八）」、『三田評論』四八一号、昭和一二年九月、二一ページ。
(18) 「昭和十二年十二月二十一日　第十五期第二回評議員会議事録」、『慶應義塾百年史』下巻所収。
(19) 前掲、「福澤講座への募金呼び掛けの趣意書」（〔F1〕）。
(20) 「昭和十三年十二月七日　第十期第一回慶應義塾評議会録」、福澤研究センター所蔵。
(21) 「渡辺七郎氏からの経過報告書」（〔F4〕）。
(22) 「ハワイ大学学長クロフォード氏よりハワイ大学上原征生氏あて書簡」（〔F2〕）。
(23) 山本勝三、「遠征雑感――野球部ハワイ遠征に対する感想」、『三田評論』五一九号、昭和一五年一一月、四一ページ。
(24) 同上。
(25) 岩本強、「布哇大学訪問」、『三田評論』五一九号、昭和一五年一一月、四六ページ。
(26) 前掲、「渡辺七郎氏からの経過報告書」（〔F4〕）。
(27) 前掲、「清岡暎一君ハワイ大学より招聘される」。
(28) 前掲、清岡暎一、「ハワイ大学の日本研究」。
(29) 同上。
(30) 平成七年一〇月二十三日に清岡氏宅で伺った話による。六〇年も前のことなので細かな部分では、清岡氏の記憶に不鮮明な所はあったが、つぎのようなお話であった。マキム師が、清岡氏に最初にこの件を打診したのは日本に於てであり、「渡し舟か何か船の中でマキムに会った時に、ハワイ大学で日本研究を、教える人を捜しているが、おまえは

どうか」という話であった。清岡氏は、「変わったことが好きなので、それも面白いと思った」という。その後、今度は、汽車の中で知り合いのアメリカ人の女の宣教師に出会ったが、その時に彼女が「ハワイ大学の話は、そのうち本物になるから、そのつもりでいなさい」と清岡氏に漏らしたのである。それから、すぐに「初対面のハワイ大学の教授が、突然にある日の昼過ぎに、白金の清岡宅を訪問し、半日雑談をした。昼の間は全くの雑談のみであり、何をしに来たのかな、と思っていたが、暗くなってきて急に、ハワイで日本の歴史を教えるが、手始めに来てくれないかと依頼を申し出た」。清岡氏の考えでは、「あの半日の雑談で、いわば試験をしていたらしい」ということであった。なお、清岡氏は、同氏宅を訪問したこのハワイ大学教授の名前は思い出せなかった。ただし、学会か何かで訪問した人で、シンクレーア教授でも、クロフォード総長でもなかったことは確認された。

(31) 前掲、「清岡暎一君出発」。
(32) 前掲、清岡暎一、「ハワイ大学の日本研究」。
(33) 前掲、『回想八十年、清岡暎一君聴き書』、七七ページ。
(34) 同上。
(35) 平成七年一〇月二三日の清岡氏からの聞き取り。
(36) この段落の記述は、全て平成七年一〇月二三日の清岡氏からの聞き取りによる。
(37) 「布哇大学副総長ケラー博士来塾」、『三田評論』四六八号、昭和一一年八月、六〇ページ。
(38) 「小泉塾長渡米」、『三田評論』四六八号、昭和一一年八月、五一ページ。
(39) 小泉信三、「渡米日記（一）」、『三田評論』四七三号、昭和一二年一月、八ページ。同、「渡米日記（八）」、『三田評論』四八一号、昭和一二年九月、二一ページ。
(40) 同上、「渡米日記（八）」、二一ページ。
(41) 平成七年一〇月二三日の清岡氏からの聞き取りによる。
(42) 第十期第一回慶應義塾大学評議会録、昭和一三年一二月七日、福澤研究センター所蔵、では八千円に換算している。
(43) 週刊朝日編、『値段史年表』、朝日新聞社、昭和六三年、五一、一一六ページ。
(44) 日本郵船株式会社編、『日本郵船百年史資料』、七七二ページのデータより計算。また、一等の場合には、昭和一三

年の横浜・シアトル間片道料金が三〇〇ドルから三五〇ドル（一〇五四～一二三〇円）程度であった（三浦昭男『北太平洋定期客船史』平成六年、出版協同社、一七二ページ）。

(45) 前掲、第十期第一回慶應義塾大学評議会録。

(46) 「ハワイ大学学長クロフォード氏よりハワイ大学上原征生氏あて書簡」（〔F2〕）。また、後援会書記であった渡辺七郎氏も、戦後の基金経過報告書（〔F4〕）の中で、「一九三九年九月までに二千六百八十六弗五十八仙の基金が集まり全額を布大会計課に引渡し……」と、募金に一九三九年九月までかかったことを述べている。

(47) 合衆国商務省編、『アメリカ歴史統計』第一巻、原書房、昭和六一年、三〇四、二九九ページ。

(48) 日布時事社編輯局、『日布時事布哇年鑑』、日布時事社（ホノルル）、昭和一二年版、昭和一六年版。

(49) 『慶應義塾塾員名簿』昭和一三年版、慶應義塾、昭和一三年。

(50) 前掲、『日布時事布哇年鑑』、昭和一二年版、五三～五五ページ。

(51) 同上、昭和一二年版、五六ページ。

(52) 清岡暎一、「ハワイの日本語学校」、『三田評論』四七四号、昭和一二年二月、一ページ。

(53) 同上。

(54) 前掲、『日布時事布哇年鑑』、昭和一二年版、一九一ページ。

(55) 前掲「ハワイ大学の日本研究」、一一ページ。

(56) 前掲、『日布時事布哇年鑑』、昭和一二年版、一九一ページ。

(57) 前掲、「ハワイ大学の日本研究」、一一ページ。

(58) 前掲、『日布時事布哇年鑑』、昭和一二年版、一八六ページ。

(59) 山本勝三氏は、昭和一一年に小泉信三塾長が渡米したさい、同じ大洋丸でハワイに赴任した。その際、ホノルル到着の前日に、乗り合わせた塾員が同船上で三田会を催している。当然、山本氏は小泉塾長とも面識があったはずである。（「洋上の三田会」、『三田評論』四六九号、昭和一一年九月、五七ページによる。）

(60) ハワイの三田会は、正規のものとして『三田評論』編集部などに登録はしてなかったが、昭和一一年、小泉信三塾長の渡米時の日記で見ると、三田会的なグループが存在していたことがわかる。同日記では、往路ホノルル寄港の際

は、港で「正金銀行諸橋支配人、三田会の同窓諸君に迎えられ」たとあり、また、復路では「塾員数氏に迎へられ、自動車にて郊外甘蔗畑の間をドライブす」、「夜、三田会員よりAiewa Heightという坂の上の日本料理店春潮楼に招かる」とある。(前掲、小泉信三、「渡米日記(一)」、八ページ、「渡米日記(八)」、二一ページ。

(61) 山本勝三、「遠征雑感——野球部ハワイ遠征に対する感想」、『三田評論』五一九号、昭和一五年一一月、四二ページ。

(62) 野口教授に内定したことは、『慶應義塾百年史』に記載されているが、『百年史』が根拠とした資料は、確認できなかった。

(63) 「渡辺七郎氏よりの経過報告書」([F4])。なおこの経過報告書の全文は後に示す。

(64) 同上。

(65) 同上。

(66) 土方晉、『横浜正金銀行』、教育社、昭和五五年。

(67) 前掲、「遠征雑感——野球部ハワイ遠征に対する感想」。

(68) 岩本強、「布哇大学訪問」、『三田評論』五一九号、昭和一五年一一月。

(69) 前掲「渡辺七郎氏からの経過報告書」([F4])。

(70) 一九五六年九月二四日付けで、福澤講座設立委員会代表上原征生名で、ハワイ大学ディーン代理ブルース・ホワイト氏に、野村兼太郎博士へ基金の全額を支払う許可状を出している([F3])。また、この書状の片隅に、「上原氏の記録によれば三五八一・四七ドルが支払われた。一九六八、一〇、二九」と手書きの英文メモがある。これは、おそらく、一九六八年に平松教授がこの資料を上原氏から受け取る時に、聞いたことを、メモしたものと考えられる。

(71) 野村兼太郎、「ハワイたより」、『三色旗』一〇六号、昭和三二年一月、一一ページ。

(72) 同上、一二ページ。

(73) 野村兼太郎、「ポリネシア人のハワイ移住について」、『三田学会雑誌』五〇巻一〇・一一号、昭和三二年一一月、六ページ。

(74) 同上。

(75) 前掲の「ポリネシア人のハワイ移住について」の他に、野村兼太郎、「古ハワイにおける社会階級の発展」、『社会経

済史学』二三巻五・六号、昭和三三年二月。同、「古ハワイにおける漁業」、『三田学会雑誌』五一巻一二号、昭和三三年一二月。同、「古ハワイにおける土地制度の変遷」、『三田学会雑誌』五三巻五号、昭和三五年五月。

(76) この年譜の範囲は、今回資料とした「野村兼太郎教授ハワイ大訪問記録」を平松教授が、ハワイで受け取った時点までとした。また、昭和三五（一九六〇）年には、ハワイ大学内に、政府直轄組織としてイースト・ウエストセンターが設立され、同センターはその後慶應義塾とも交流があったが、これはハワイ大学とは別の組織との交流であるため、この年譜からは省略した。なお、イースト・ウエストセンターと慶應義塾との初期の交流については、気賀健三「塾の高校と中学校の英語の先生たちのハワイ留学」、『三田評論』六一二号、昭和三八年二月、四六―五〇ページ、に詳しい。

(77) 「渡辺七郎氏からの経過報告書」（[F 4]）。

(78) 「雑報　野村図書館長ハワイ大学へ」、『三田評論』五七一号、昭和三一年一〇月、三九ページ。

(79) 前掲「渡辺七郎氏からの経過報告書」（[F 4]）。

(80) 「野村兼太郎講演草稿」（[F 5]）の文頭に“Delivered Jan. 17. 1958”と手書きで日付が記入してある。

(81) 「雑報　野村図書館長帰国」。『三田評論』五七三号、昭和三二年九月二五日、六五ページ。

(82) 昭和三二年七月二五日の「第十九期第十七回慶應義塾評議員会議事録」（福澤研究センター所蔵）には、奥井塾長のハーヴァード大ビジネス・スクール等の視察予定の報告があり、また「本塾（筆者注…慶應義塾）百年祭を世界的規模に於て行う可し」との「ハワイ大前総長シンクレア氏提案の問題についても研究して来たい」と報告があったとある。

また、昭和三二年一一月二〇日の「第十九期第十九回慶應義塾評議員会議事録」（福澤研究センター所蔵）には、訪問成果報告についての記事があり、「ハワイでは、ハワイ大学を訪問、ウイルソン総長代理やシンクレア氏に面会した。シンクレア氏は非常な福澤先生崇拝家で、世界は、福澤を知らなければならぬ、それが世界の為めであることを強調していた。」と出ている。

なお、一行は一〇月九日に出発し、奥井塾長は一一月七日に帰国、金原賢之助教授と小林規威講師は一一月二五日に帰国している（「塾報」、『三田評論』五七四号、昭和三二年一二月、四二ページ）。

(83) 野村兼太郎講演草稿（[F5]）の文末に「昭和三十二年十一月二日　布哇滞在中に寄せられた御親切と御厚情に感謝して　奥井復太郎／贈　上原征生学兄／福翁自伝新訳版　昭和三十二年二月　慶應通信」と、メモがある。奥井塾長は一一月二日にハワイ大学の上原征生教授に逢い、英訳『福翁自伝』昭和三二年版を贈呈したと推測できる。

(84) 「奥井塾長一行訪米日記（続）」『三田評論』五七六号、昭和三三年五月。

(85) 同上、この日記の一一月二一日の所には、「正午ハレクワ・ホテルにてシンクレア氏主催の午餐会に出席。約二時間半にわたり、所謂シンクレア計画につき懇談した」とある。

(86) 前掲、「シンクレア教授名誉学位授与関係書類」。

(87) 「三田ニュース（海外出張）」、『三田評論』六〇三号、昭和三七年三月、四四ページ。
米山桂三、「海外訪問記　ハワイ」、『三色旗』一七八号、昭和三八年一月、六～一一ページ。
米山桂三、「ハワイで見たアメリカ」、『三田評論』六一〇号、昭和三七年一一月一二月、一六－二六ページ。

(88) 『慶應義塾報』四〇四号、昭和四三年一一月二五日

(89) 前掲、「ハワイたより」、一二ページ。

(90) 例えば、野村兼太郎、『徳川時代の経済思想』日本評論社、昭和一四年、第四章。

[本稿を作成するにあたり、清岡暎一氏からは貴重なお話を伺った。また千葉商科大学の藤原昭夫教授、慶應義塾大学経営管理学科の小林規威教授、慶應義塾女子高校の浜野潔氏からは貴重なアドバイスをいただいた。また、慶應義塾福澤研究センターの西澤直子氏、慶應義塾経理課の北村和夫氏、同総務部の方々には、資料の収集で、お世話になった。感謝申し上げる次第である。]

（こむろ　まさみち　経済学部助教授）

〔付録〕

福澤諭吉と日本の近代化

野村兼太郎
（小室正紀 訳）

一八六八年の明治維新以降、日本は、西洋を模範として急速に資本主義的機構を発展させました。すなわち、日本はアジア諸国の中で、産業革命を経験した唯一の国です。その急速な社会変換は、奇跡的というか、少なくとも説明しがたいもの、と思われるかもしれません。どのようにして日本はそんなに急速に社会変換を行い得たのか。実際に、私は海外の学者から、何度か質問されたことがあります。私は、この質問に、いつも次のように答えてきました。もし徳川時代の思想の流れと経済史を十分に理解したならば、日本における資本主義的制度の急速な勃興は、全く奇跡ではなく、自然で必然的な展開であると思えるでしょうと。歴史には、何ら断絶はなかったのです。

徳川時代が鎖国の時代であったことは事実です。また、個々の地域が自給自足的農業を営むことを、幕府が、理想の政策と考えていたことも事実です。幕府は、オランダ以外のヨーロッパ諸国に対して、日本の門戸を最終的に閉ざしました。西洋の学問は、オランダとの貿易が行われていた長崎を通して入って来るのみでした。

当時は、江戸や大坂のような比較的大きな都市には蘭学者がいましたが、普通の町には、「横書きの奇妙な文字」である欧文を理解できる者は、一人だに居ませんでした。またヨーロッパの文字の形を見たことがある者も居ませんでした。長崎は洋学の唯一の中心であり、福澤はオランダ語を学ぶために、その地に赴きました。もし

(三分の二行程判読不能)

ならば、日本の歴史は変わっていたかもしれません。しかし、それでもなお、日本は資本主義国になったと思われます。なぜならば、日本の経済の発展は、ヨーロッパと非常に似かよっていたからです。日本には、ヨーロッパ中世の荘園やギルドに似た組織がありました。もちろん、日本列島はアジア大陸の沿岸から非常に近い所に位置しており、シナ文化の影響下にあったのは当然です。この点で日本は、まさに東洋的ですが、しかしこの東洋文化さえ日本化されて来ました。

徳川時代後期には、貨幣経済の発展とともに、富裕な商人は、交易や利貸により徐々に富を蓄積しました。政治的影響力のある武士階級と組むことにより、彼等は多額の利益を獲得しました。しかし、市場がもっぱら国内であったために、商人の投資対象は非常に限られていました。富裕な者達の多くは、自分の金を、製造業にではなく利貸に使用しました。彼等の濫費は、国民経済にとって有害でしたが、多くの貧困者に仕事を与えることになりましたし、また手工業技術の発展に寄与しました。蒔絵や陶磁器や絹織物業は、このような富裕層や大名の保護の下で、高度に発展し、日本を世界的に有名にしました。しかし資本主義への歩みは、まだほんの初期段階にしか過ぎませんでした。市場がもっぱら国内であったという事実は、おそらく資本主義的制度の発展の一つの障害でした。商人は、封建体制に依存せざるを得ませんでした。これらの経済的状況と諸社会階級間の貧富の差が、社会不安をつのらせたのです。

ここで、私は日本人の精神的特性に言及したいと思います。二つの相対立する特性があると私は思います。一

方で、日本人は非合理的、あるいは非論理的であり、情熱的と言うよりは感傷的です。また、時には迷信深いと言われるかもしれません。他方で、日本人は飾り気がなく、現実的であり、また合理的でさえあります。

儒教の影響と古い封建的家制度により、徳川時代には、ある種の社会秩序が確立されました。ヨーロッパ中世の場合とちょうど同じように、日本の中世以前には、個人の家に対する関係は、もちろん従属的でした。日本においては、個人のために家が存在していたのではなく、家のために個人が存在していたことは、疑いがありません。あらゆる事が、個人の利害ではなく、家の観点から考えられたことは、言うまでもありません。従って、「家は社会の構成単位であり、各々の家族員は、この単位の単なる一断片にしか過ぎない。家のために各々の家族員は、ほとんど全てを犠牲にしなければならない」、と言われました。この考えは、十七世紀以降の儒教の隆盛により、徳川時代に強化されました。

家では家父長的権威は、非常に大きいものでした。「孝は徳の本」という教えの下に、両親への絶対的な服従が、至高の道徳と思われていました。家の存続のために、子供は親の命令に犠牲的に仕えることが、基本的な義務でした。たとえ親の命令が不当であったとしても、子供はその命令にいやおうなしに従うべきだったのです。『論語』には、次のようにあります。

父母に事うるには幾くに諫む。志の従われざるを見ては、又た敬して違わず。労して怨まず。（里仁第四十八項）（訳注1）

（父母につかえる場合に、息子は彼等に諫言をしてもよいが、温和に行わなければいけない。父母が忠告に従いそうもない時には、息子は、一層うやうやしい態度を示し、しかし諫言の目的は捨てない。もし父母が

かれを罰するならば、不平を感じてはいけない。）

孔子の言葉は、当時の日本人にとって至上命令でした。子供は、一、二回は諫言できましたが、父母が強いる時には、従わなければなりませんでした。

父権的思想は、日本において上下を問わず、あらゆる人間関係に拡がっていました。この仕組みは、君臣関係から始まり、雇主と奉公人、師弟、地主と小作人などのような、全ての人間関係を覆っていました。上の者は、下の者を援助し保護すべきであり、下の者は、子の父母に対するがごとく、上の者に従順でなければならなかったのです。

その上、大部分の人々は、自分が生まれた地位を替えられない運命でした。武士階級においてさえ、どの藩でも、家老から最下士に至るまで、その格は固定していました。全てにおいて、武士の社会的立場や公の役割には、百にものぼる、さまざまで細かい区別がありました。しかし、大まかに言うならば、武士は、上士と下士の二階級に分けられていました。

福澤は、九州にあった中津奥平藩の下士の家に生まれました。父親は、十三石二人扶持の中小姓でした。小藩では、普通は、家老は知行高千石を取り、また大藩では一万石以上でした。つまり、十三石取りの武士は、ほとんど最下級の武士だったのです。中小姓の役は必ずしも定まったものではありませんでした。福澤の父親は藩の大坂蔵屋敷の元締役を勤めていました。この立場の者にとって、どんなに努力をしたとしても、何であれ世に身を立てる望みは全くありませんでした。

このような社会には、個人の束縛からの自由も、独創への自由も存在していませんでした。この社会は、国内

の密偵体制により守られた変化のない社会だったのです。

しかし徳川後期には、貨幣経済の発展とともに、考え方が変化しはじめました。すでに述べたように、日本人は現実主義的な国民であり、このことが、俗人行動の教えに重きを置く儒教を、日本が、指導的理念として受け入れた理由の一つでした。したがって、状況の変化とともに、多くの合理主義者が現れたのです。

たとえば、海保青陵（一七五五～一八一七）は、当時の経済論者でした。彼は儒者でした。彼は、「超越的真理はない。理外の理はない。理は知覚されるあらゆる物を識別する能力である。」[訳注2]と言っています。これは、人間が知性的であるか否かを確かめる場合の第一に、理性の存否を挙げた思想体系であり、合理主義に他なりません。また彼は「自然とは理のこと也、理こそ自然也」[訳注3]とも言っています。

十八世紀末以降、合理主義者と呼びうる多くの学者がいました。彼等のうちの何人かは、既に英文で紹介されています。例えば、ドナルド・キーン氏は、その著『日本人の西洋発見』において、本多利明を紹介し、またE・H・ノーマン氏は安藤昌益について書いています。

幕末に、思想変化のこの傾向は、強まりました。概して武士は金勘定を軽蔑し、したがってまた数学を見下していました。福澤の父親は、自分の子供たちが、大坂で算術（ソロバン）を教えられていると聞き、烈火の如く怒り子供達を連れ去りました。彼は、「幼少の子供に、（商人の道具である）勘定のことを知らせるというのはもっての外だ。〔こういう所に子供は遣って置かれぬ。〕何を教えるか知れぬ。」[訳注4]と叫んだのです。これはむしろ武士階級の間では一般的な考えでした。しかし儒者であった帆足萬里は、鉄砲と算盤は士流の重んずべきもの、という意見でした。福澤の兄は純粋な漢学者でしたが、帆足の意見を汲み、数学を学びました。当時の精神はこういうものであったのでしょう。

福澤は、有名な『福翁自伝』の中で、子供時代に神がかりの事柄に疑問をもったことを語っています。後に東京帝国大学の日本言語学の教授になった、バジル・ホール・チェンバレンは、彼の有名な“Things Japanese”という本の中で、「この自伝は日本語で書かれた最も面白い本の一つである」（注 p.292 of B.H.Chamberlein, *Things Japanese*, 4th ed. London,etc. 1902.）と述べています。『福翁自伝』は、一八九九年に出たもので、口語体で書かれています。幸い、『自伝』は、福澤の孫である清岡暎一教授により英語に翻訳されています。

子供の時に、福澤は、神仏を冒瀆するようなことを口にしてみたり、年寄りが子供を叱るときに使う神罰冥罰などという話は嘘だと決めてかかったりしました。彼は次のように言っています。「幼少の時から神様が怖いだの仏様が難有（ありがた）いだのということは一寸（ちょい）ともない。卜筮呪詛（うらないまじない）一切不信仰で、狐狸（きつねたぬき）が付くというようなことは初めから馬鹿にして少しも信じない。」

一般に、西洋思想における合理主義は、主に宗教の主張と戦いながら出現してきました。しかし日本においては、激しい宗教改革は、全くありませんでした。国土の自然環境とシナ思想（特に老子の哲学）が、日本人を非宗教的にしました。日本人の宗教感情は、古代の祖先信仰に一つの現れが求められる、とも言われています。

徳川後期には、若い世代に合理主義的傾向が、芽生えていました。開国が行われたのは、このような状況の下でした。しかし、たとえ対外関係が再開されなかったとしても、国内の経済的行き詰まりと戦う何らかの方策が、必然的に考案されたでしょう。下級武士や小農民が、あのような低水準の生活に、甘んじたままでいることは、不可能だったでしょう。多くの百姓一揆が勃発していました。反抗の心が、下級武士の間に起こりつつありました。下級武士の中には、多くの才能のある者がいましたが、彼等は、気力のない上級武士には御しがたい者達でした。彼等は機会を窺っていました。福澤はそのような下級武士の一人だったのです。既に述べたように、彼は

まず、オランダ語を学びに長崎に行く道を開き、つづいて大坂へ上りました。大坂では、緒方塾で医学研究に絡んで、オランダ語が教えられていたのです。一八五八年に、福澤は江戸（現東京）で塾を開きましたが、これが現在の慶應義塾の前身であり、来年は義塾の百年祭が挙行されることになっています。

翌一八五九年には、いわゆる「五ケ国条約」が結ばれ、横浜港が外国との交易のために正式に開かれました。ある日、福澤は横浜見物に出かけました。彼は、商人の間で使われている言葉が、オランダ語ではなくて英語であることを発見します。かくも長年をかけて学んだオランダ語が、役に立たないことを、彼は、発見して、たいへん失望をしました。しかし少しもひるまず、彼は、ほとんど独学で苦心して英語を学び始めました。そして後に、彼は自分の塾で英語を教えました。したがって慶應義塾は、日本で最初の英学塾となったのです。福澤自身は、一八六〇年の、幕府の最初の遣米使節の随員に加えられ、アメリカの文化に非常に影響をうけました。

福澤は明治維新期において、最も影響力のある先覚者でした。彼の革新的な見識は、新興の世代の需めに合っていました。福澤を、明治革命期[訳注5]における知的指導者と呼ぶことは、少しも誇張ではなのです。明治時代に日本の諸問題を指導した人々の多くは、多かれ少なかれ、彼の影響を受けていました。福澤は世間一般の啓蒙に努めたのです。

福澤は、封建制の硬直した拘束的な性質を拒絶しました。彼は封建制を嫌悪していました。この考えは、彼の家族生活のなかで、心に抱かれたものでした。彼は、自伝の中で、次のように語っています。社会の中で、僧職が出世の唯一の道と思われたので、福澤を坊主にするのが父親の元々の意向であったと。僧職であれば、何でもない魚屋の息子が大僧正になる可能性があったのです。福澤は次のように言っています。

「こんなことを思えば、父の生涯、四十五年のその間、封建制度に束縛せられて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ。また初生児の行末を謀り、これを坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したるその心中の苦しさ、その愛情の深き、私は毎度このことを思い出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心を察して独り泣くことがあります。私のために門閥制度は親の敵で御座る。」

勿論、福澤自身は、下級武士として同様の屈辱を経験していました。彼は、人民の奴隷根性を嫌うと同時に、封建制に反対する強い感情を持っていました。しかし、もし彼が上級武士の家に生まれていたならば、彼が成し遂げたようなことを、することが出来たかどうか疑わしいでしょう。かれの強い抵抗心は、環境の成せるわざであったのです。

この抵抗心が、福澤が熱心に強調した独立精神に発展しました。彼は、日本人を自立した人間にしたいと思いました。彼は、自分の塾である慶應義塾を通して、この思想を説くことを意図しました。彼は、慶應義塾が知的・社会的影響を発する中心であるばかりでなく、教育機関として知られることを望みました。このため、福澤自身は使わなかった言葉ですが、"the principle of independence and self-respect"、即ち日本語で「独立自尊」が、慶應大学の掲げる信条となったのです。

福澤は、どのようにして、この深い信念を得たのでしょうか。彼はアメリカの文明とヨーロッパの文化を見ました。彼は多くの西洋の書籍を読み、そこから西洋文明の驚くべき科学的進歩を知りました。彼は、儒学や仏教という東洋の知性と西洋の知性を比較しました。前者の場合には、進歩がないが、後者の場合には、常に進歩的で発展的な展開があり、それが人間の生活をより幸福に、より豊かにしていました。この事実に直面し、自然科

学を信じ、熱心な経験主義者になったのです。チェンバレン氏は、「常識的な経験主義、すなわちアメリカのフランクリン主義は、鋭敏で実践的だが、やや散文的な福澤の知性に正に適合していた。」と、言いました。ベンジャミン・フランクリンが、福澤に直接に影響を与えたということを示す証を、私は、これまで発見できていませんが、福澤がアメリカ経験主義に非常に魅かれていたのは事実です。既に指摘しましたように、彼は強い合理主義的傾向を持っており、彼の合理主義的思考方法は、いわゆる常識的経験主義によって達せられていました。

福澤はアメリカに興味を持っていました。一八六三年の二度目の訪米の時に、彼は自分の塾で教科書として使うために、多くのアメリカの本を入手しました。一八六八年の江戸上野の戦闘の日に、彼が講義に使っていた英書は、一八六六年版のフランシス・ウェーランド著の『政治経済学要綱』でした。この本は、アメリカで非常によく知られたものでしたし、また日本でも広く読まれました。当時のアメリカ経済学は、経済理論としては自由主義であったとしても、強い倫理的傾向を持っていました。ウェーランド自身は牧師であり、また道徳哲学の教授でした。彼は、『道徳科学要綱』も書きましたが、本書も日本で教科書として使われました。当時の日本の知識人は、多かれ少なかれ儒教の道徳教義の影響を受けていましたので、ウェーランドの『道徳科学要綱』は、日本の比較的若い世代の者に、むしろ向いていたのです。このようにして、西洋化の開始以来、日本はアメリカの知性に影響されました。

要するに、福澤は、東洋の教育においては、物質面では「数理」の学が欠けており、精神面では独立心が欠けている、と考えました。かれは、文筆家として、また教育者として、自国民の啓蒙に努めましたし、またどちらにおいても、驚くほどの成功を収めました。彼は、多くの様々な本を著しました。彼は、ほぼ六十種の単行本を出版したのです。最も有名な本は『西洋事情』でした。初篇三巻は、一八六六年に、第二篇三巻は、一八六七年

に、第三篇四巻は、一八六九年に出版されました。初篇と第二篇は明治維新以前に出版されたということに、私は、特に注意を喚起したいと思います。この本は、ヨーロッパの文明を学びたいと思っていた人々にとって非常に貴重な手引きとなりました。それ故に、本書は、好評をもって受け入れられました。正規の版で十五万部が売られました。もし、大坂で印刷された偽版を加えれば、総販売部数は二十万冊を下りません。この事実だけで、福澤が、文筆家として、非常に成功していたことを証するのに十分でしょう。

福澤は、日本の歴史において極めて重大な時期に、世間一般の啓蒙と社会変革に努めました。晩年、日清戦争（一八九四～九五年）直後に、彼は、「顧みて世の中を見れば堪え難いことも多いようだが、一国全体の大勢は改進進歩の一方で（あると思います）」（訳注6）と述べていますし、また「吾々共は丁度都合の宜い時代に生まれて祖先の賜物をただ貰うたようなものに違いはない」とも言っています。初めて勉学を始めた時に、彼は西洋文化についての知識を、獲得しようとしました。そして後に彼は、人心を根底から革新し、絶遠の東洋に偉大な国を開くことを望みました。望みは満たされ、彼は満足をしていました。

しかし、当時の日本は、産業革命の開始段階に到達したばかりでした。二十世紀の最初の年である一九〇一年に福澤が死んだ後に、日本の資本主義は、さらに大きな進歩を遂げました。その時以来、半世紀以上が経ちました。現在の日本は、当時と違いますし、世界も全く変化しました。日本の西洋化は急速に進展して来ました。しかしまだ、多くの古い点が残っています。ある学者は、日本では矛盾や闘争が特に激しい、と言っています。外国の文化により革新された日本のような国では、これは当然のことなのです。しかし、矛盾というものは、人間生活についてまわるものであります。どこにでも、我々は多くの矛盾を簡単に発見することができます。人類進歩の初めから、人間の本質自体が、矛盾を抱えていたのです。日本人は、まだ、いくつかの旧慣に執着していま

すが、社会や経済の機構に大きな変化が進行しています。留保なしに福澤の意見を全て受け容れることは不可能ですが、我々は依然として、個人の独立に関する彼の見解は、顧みて考えるべきなのです。

独立は、孤立を意味しません。自尊は、自惚れや傲慢ではありません。それは、あらゆる個人が、個々の人間存在を重んじることを意味します。自分の生きる価値を確立する者は、当然、他人の価値も重んじます。すでに述べたように、矛盾は、人間生活についてまわるものです。多くの人間がいれば、それだけの数の心があります。いろんな人が寄り集まって、世の中は成り立っています。この多様性の中で、人間の理解力によって調和が達成されるのだと、私は思います。もし、あらゆる者が常に他人を重んじるとすれば、それは理想の世界でしょうし、またその世界では、個々人の能力を十分に発展させることが、可能でしょう。

しかし、今日の世界は、まだ完全というには、程遠いものです。人間の生命は重んじられていません。最近、極東において起こったことや、またとりわけ東欧において起こったことは、人類の野蛮な性質を示しています。これが文明と呼べるでしょうか？　私は「否」と言わざるをえません。長い目で歴史を見るとすれば、現在はまだ半野蛮時代に属していると、一歴史家として、私はしばしば考えています。

現在が、世界史において、危機の時期であることは事実です。私は、日本の危機の時期に際して福澤諭吉がとった態度を、思わざるをえません。福澤の先見の明のある客観的な姿勢を初めとして、福澤から学ぶべき多くのことがあるのです。

訳注

（1）　ここに示した訳は、吉川幸次郎による『論語』の当該個所の読み下しである（吉川幸次郎、『論語』（上）、朝日新聞

社（朝日文庫）、昭和五二年、一二一ページ）。これに対して、野村教授の草稿を、訳すると、後に付記した（　）内のようになる。また、「又た敬して違わず」の部分では、野村読みでは、「一層うやうやしい態度を示し、しかし諫言の目的は捨てない」としているが、吉川読みでは「さらにもう一度、敬虔な態度を示して、その気持ちに逆らわない」としており、解釈が異なる。

（2）『海保青陵経済談』天王談の文脈であるが直訳ではなく、文意をとった訳である。

（3）『海保青陵経済談』天王談の直訳。

（4）元は『福翁自伝』中の文であるが、野村教授は、英訳では（　）内を補足し〔　〕内を削除している。

（5）すぐ前では明治維新の「維新」に対して、“in Restoration period”と“Restoration”という単語を用いているが、ここでは“in the Meiji Revolution”と表現している。

（6）（　）内は野村教授の英訳で補足されている部分。